

## 翻 訳

### 『匿名のガル年代記』第二巻（翻訳と注釈）

〔第30章から第50章まで〕

荒 木 勝

以下の翻訳は、写本ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版を検討したカロール・マレチンスキ K. Maleczyński の校訂本を用いた（Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principum Polonorum [Monumenta Poloniae Historica, Nova series, Tomus II, Cracoviae 1952]）。

注釈に関しては、ビェロフスキ (A. Bielowski)、マチレンスキ、プレジア (M. Plezia)、グロデツキ (R. Grodecki)、ブイノッホ (J. Bujnoch)、シラフトフスキー・ケプケ (I. Szlachtowski, R. Koepke) に拠った。注釈においては、注釈者の見解をそれぞれに

Bielowski → [Bi]、Plezia → [P]、Grodecki → [G]、Bujnoch → [B]、Maleczyński → [M]、I. Szlachtowski, R. Koepke → [S]

と略記し、以下にその見解を紹介した。それ以外の注釈は訳者のものである。参照した翻訳は、グロデツキ訳をふまえたプレジアによるポーランド語訳 *Anonim tzw. Gall, Kronika Polska*, Kraków 1982 [BIBLIOTEKA NARODOWA, Nr. 59]、ブイノッホのドイツ語訳 *Polens Anfänge, Gallus Anonymus, Chronik und Taten der Herzöge und Fürsten von Polen*, Verlag Stria, Graz-Wien-Köln 1978 である。典拠については、聖書は、シュトゥットガルト版の *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* 1969（その翻訳は、とくにことわりがない限り、『合同訳聖書』日本聖書協会、1991年）に拠った。ギリシヤ・ラテンの古典については、*The Loeb Classical Library* に拠った。12～13世紀の東欧の年代記類については、*Monumenta Germaniae Historica, Scriptorum* に拠った。

## 第三十章

その間に、ポーランドの宮廷伯スカルビミルは<sup>1)</sup>、自分の一党を率いてポモジェに攻め入り、そこでポーランド人に対しては少なからざる名声をもたらし、敵に対しては損害と侮辱を与えた。スカルビミルは、多くの村や家畜の略奪者と呼ばれるよりも、砦と都市の征服者と呼ばれるのを好んだ。それゆえ、大胆に、また猛烈に一つの砦を攻め落し<sup>2)</sup>、そこから幾人かを捕虜とし、戦利品を奪い、砦全体を完全に焼き尽したのである。

(30)

Interea Scarbimirus : comes Polonie palatinus<sup>1)</sup>, : cum suis commilitonibus : Pomoraniem introivit, : ubi non parvam gloriam Polonis acquisivit, : hostibusque suis dampnum et contumeliam dereliquit. : Qui castellorum vel civitatum nominari maluit expugnator, : quam villarum multarum fieri vel armentorum depredator. : § Igitur audaci violentia unum castellum<sup>2)</sup> expugnavit, : unde quibusdam modo captivatis, eductaque preda totum radicitus concremavit. :

- 1) [P] アウダンツィ族出身で、最初ボレスワフ・クシヴウスティの養育係、次に代官となった。
- 2) [訳注] グンプロヴィッチによれば、この砦は、ルブチェスコ湖 Lubczesko の中にある島の砦か、あるいは岸のトゥチノ Tuczno である。このトゥチノは、シチェチンとビドゴシチとの中間に位置している。

## 第三十一章

八  
七

またある時に、スカルビミルは同じようにビトムという名の<sup>1)</sup>別の砦を占領した。そして、そこから他の場合と同じように<sup>2)</sup>、多くの称賛と利益を獲ち得た<sup>2)</sup>。すなわち、そこから多くの戦利品と捕虜を持ち帰り、その場所を<sup>3)</sup>荒地の如き姿に変えてしまった<sup>3)</sup>。しかしスカルビミルについて、このような話を

するのは、彼を彼自身の主人と比較しようとするのではなく、物語の真実を書き留めておくためである<sup>4)</sup>。

## (31)

Alia vice similiter aliud castrum nomine Bitom<sup>1)</sup> expugnavit, : unde non minus laudis et utilitatis quam ex alio reportavit. : Nam inde predam<sup>2)</sup> multam et captivos expulit<sup>2)</sup> : et locum illum ad instar<sup>3)</sup> desolationis retulit<sup>3)</sup> : Sed hoc non ideo de Scarbimiro recitamus, : ut eum in aliquo suo domino conferamus, : sed ut veritatem hystorie teneamus<sup>4)</sup> :

1) [G] シロンスクのビットム Bytom ではなくポモジェのビトゥフ Bytów であろう。

2) — 2) [M] 十一音節詩句。

3) — 3) [M] 十一音節詩句。

4) [M] スカルビミルの出征の時期は一一〇五年の秋であったと思われる。

## 第三十二章

さて、戦好きのボレスワフは、ハンガリア人との会談から帰った後、自分の兄ズビグニエフとの会談を新たに整え<sup>1)</sup>、そこで二人の兄弟は、ともに一方が他方に対して、以下のような言葉で同盟の誓いを立てた。すなわち、二人のうち、一方は他方の同意なしでは和戦の決定をせず、また一方は他方抜きに、誰ともいかなる同盟をも結んではならず、また敵に対しても、いかなる危急の場合に対しても、一方は他方を助けなければならない、というものであった。二人は、以上のことを確かめ合い、また軍勢を率いて合流する日時と場所を同じような誓いのもとに約定した後、会談の場から立ち去った。

さて、休むことを知らないボレスワフは、約束を守るために、定められた日に、また定められた場所にわずかの手勢を率いて急いだ。しかし、ズビグニエフの方は、約束と誓約を破り、その地に赴かなかったばかりか、自分の方に近づく弟の軍勢の行軍を阻げたのである<sup>2)</sup>。そこから、後にズビグニエフも、その他の人も決して取り除くことのできなかった重大な災難と恥辱がポーランド王国に生じる定めとなった。今、どのようにして神の加護のもと、

ボレスワフがこの危険を回避したのか、を次の頁で明かにしようと思う。

## (32)

Belliger itaque Boleslaus postquam de colloquio Vngarorum est reversus, : cum Zbigneo fratre suo colloquium aliud ordinavit<sup>1)</sup>, : ubi simul ambo fratres in hec Verba alter alteri coniuravit, : quod alter scilicet non sine altero de pace vel bello cum hostibus conveniret, : nec ullum fedus alter sine altero cum aliquibus communiret : et quod alter alteri super hostes et in omnibus necessariis subveniret. : § Hiis itaque confirmatis, sub eodem iuramento diem et locum ubi cum exercitibus convenirent, indixerunt : et sic a colloquio discesserunt. : Impiger autem Boleslaus cum paucis ad locum venire determinatum in die nominato, fidem servaturus, festinavit, : Zbigneus vero non solum fidem et iusiurandum non veniendo violavit, : verum etiam fratris exercitum ad se declinantem ab itinere revocavit<sup>2)</sup>. : § Unde pene regno Polonie tale debuit dampnum et dedecus evenire, : quod nec Zbigneus potuisset nec alius postea subvenire. : § Nunc qualiter Deo iuvante Boleslaus illud periculum evitaverit, : subsequens statim pagina propalabit. :

- 1) [訳注] グンプロヴィッチ、ティツ、グロデツキは、クシヴウスティとズビグニエフとの会見の年を一一〇六年としているが、マレチンスキは一一〇五年の秋としている。前者の主張は、この会談はズビグニエフによるボレスワフの自立的なポモジェ政策への抑制を意図したものと解されているが、マレチンスキは、この会談のイニシャティブをクシヴウスティに帰し、ポモジェ攻略への共同をクシヴウスティの側から呼びかけたものである、と解している。Gumplowicz, *Zur Geschichte Polens*. p. 54-55. Tyc, *Zbigniew*, p. 7. Grodecki, *Zbigniew*. p. 100. Maleczynski, *Bolesław Krzywousty*, p. 37.
- 2) [訳注] グロデツキは、この文章を次のように解釈している。すなわち、兄弟との約束を破ったのはむしろボレスワフの方であり、またボレスワフの支配する領地の騎士達ですら、ズビグニエフの地位をボレスワフより上位にあるものと認め、ズビグニエフの命令に従って帰還した、と理解している。従って、ここからグロデツキは、ズビグニエフこそがポーランドの軍事命令権を掌握していたと主張する。Grodecki, *Zbigniew*. p. 8. マレチンスキはこの見解を退ける。すなわち兄弟間の約束は、クシヴウスティのイニシャティブに依っており、当時クシヴウスティは、外交政策をポモジェ攻略にしばらく込み、ズビグニエフと共同でポモジェを領有しようとしていた。しかしズビグニエフはそもそもこのポモジェ攻略に反対であったので、兄弟間の約束の条項を利用して、ボレスワフのポモジェ攻撃を妨げようとした、と。Maleczyński,

Bolesław Krzywousty., p. 38.

### 第三十三章

たまたま、ある貴族が国境の地に、教会を建てたことがあった<sup>1)</sup>。彼はその聖別式に、まだ少年といってもいいボレスワフ公を、その仲間の若者達とともに招いた。こうして、まず霊的な聖別式が催され、それに続いて結婚の儀式がとり行われた。しかし、神の聖餐式と肉による結婚とをともに祝うことが、神には不快なことに思われたのではないか、という点は、しばしば、そこから生じる災いから容易に確認することができる。というのは、教会の聖別式と結婚式とが同時に行われるところには、しばしば騒動と殺人が伴うことを我々はよく知っているからである。それゆえ、このような習慣を模倣することは明らかに善いことでもないし、誉れに値することでもないであろう。しかし、今この点に触れるのは、結婚を批難するためではなく、それぞれの事柄をそれぞれに相応しい場所と時に残しておくためである。この問題に対する明白な証しを全能の神は、ルーダの教会の聖別式の中に示された<sup>2)</sup>。というのは、そこでは人が殺害され、一人の司祭が発狂し、またよく知られているように、婚約した二人も不幸な結婚に至り、結婚記念日すら迎えることができなかったからである<sup>3)</sup>。しかし不可思議なことについては沈黙し、我々の主題に立ち帰ることにしよう。

さて、戦好きのボレスワフは、宴会や飲酒よりも、武芸と狩猟を好んだので、長老達を宴会の大勢の中に残して、極くわずかのお供の者を連れて、狩猟のために森の中に入ってしまった。しかしその時、敵兵と狩りをする者が出会ってしまった。すなわち、ポモジャ人がポーランドの地を荒し回り、捕虜と戦利品とを奪い、放火を働いていたからである。その時、戦好きのボレスワフは、あたかも尾を打ち振り<sup>4)</sup>、怒りに燃えた獅子のように、君侯や兵士をも待たずに、まるで子を奪われた時の血に飢えた雌獅子のように<sup>5)</sup>、荒し回る略奪者の一群を一瞬のうちに自分の剣で追い払ってしまった<sup>6)</sup>。しかし、彼らをますます深く追跡し<sup>バトリア</sup>国の受けた損害の報復を果そうとした時、知らぬ間に奸計に陥り、取り返しのつかない損失をこうむった。事実、ボレスワフの

もとは、少年と青年とからなるわずか八十人の兵士しかいなかったが、敵方の軍勢は三千人を越えていたからである。しかしボレスワフは、逃亡を求めず、このような大軍を物ともせず、まず手始めに、小部隊を率いて敵の密集部隊に突入していった。今や多くの人々にとってはおそらく信じられない程の驚くべき事柄を語らねばならない。それを彼の自惚れのせいにすべきか、それとも大胆さのせいにすべきか、私にはわからないが。すなわち、ある者が殺されたかと思うと他の者も離散し、自分の味方をあらかた失い、わずかに五人を残すところとなった時、ボレスワフは二度目の突撃として、敵の最も密集したところを打ち貫いたのである。しかし、三度目の攻撃のために向きを変えようとした時、部下の一人が、馬の内臓が地に流れ出しているのを見て叫んだ。「殿、戦を止めたまえ、再び闘いの場に入りたまうな。御身を惜しめ、祖国を惜しめ。我が馬に乗りたまえ。我が身、御身の替りになりて倒れん」。この言葉を聞いたボレスワフは、馬が倒れようとした時にやっとこの騎士の忠告を聞き入れ、しばらくの間戦場から身を引き離したのである。そして自分自身の力も非常に消耗していたし、また騎士の隊長であったスカルビミルが残りの者の中にいないのを見て、もう勝利を取り戻すことはできないと観念した。またボレスワフから離れたスカルビミルは、別の場所で酷い傷を身に受けていた。それは涙なしには語れない程のもの、つまり右の目を失うという大傷であった。

宴会の席に残っていた人々は、起った事件を聞き、席を立てて苦戦している仲間のところへ駆けつけた。しかし着いてみると、ボレスワフがやっと三十人ぐらになる小数の者とともに戦場から逃げず、逆に逃げ出していく敵を一人また一人と追跡しているのを見た。しかし、敵方も、抵抗してさらに戦を交えようとする力はすでになく、我が方の軍も、疲れ果てて彼らをこれ以上攻める力も失っていた。実際、異教徒達は、この若者のあまりの大胆さに驚き、彼ら自身が多くの死者を出し、悲しむべき勝利しか収めることができなかったのに、むしろボレスワフがこれ程わずかな手勢だけで、これ程多くのことを大胆に成し遂げ、かくも激しく攻め立てたことを誉め称えた。彼らは言った。「この少年はいったい何者にならん<sup>7)</sup>。さらに大きくなって、さらに大勢の人々を味方につけた暁には、いったい誰が戦で彼に抗うことができようか。」こうして異教徒達は、こうむった損失を嘆き、同時に不安げにボ

レスワフの証<sup>あかし</sup>された勇気について愚知を言い合った。そして戦利品を背負って、ではなく、悲しみを背負って国に帰っていった。

翌日、味方の軍勢が、援軍として、というよりも慰めとしてボレスワフのところに到着した。その地に着いた有力な貴族達は、貴族出の多くの者が倒れたことに心を痛め、ボレスワフに敬意を表しつつも、このような向う見ずとも言える大胆さを批難した。しかし、マルスの子ボレスワフは、戒めた者達に耳を傾けなかったばかりか、このようなことを敢えてしたことを後悔もせず、逆に彼らに対して、自分への忠誠を誓わせ<sup>8)</sup>、自分を援け、敵に報復すべきことを思い起こさせたのであった。またその地では、ボレスワフは胸あてや兜で槍や刀の多くの打撃を凌いだので、幾日も続いた戦で疲れた彼の体には、刀傷の多くが跡を留めていた。また、誉れ高くもその地で倒れた自分の部隊の若者に対しては、それ程心を痛めなかった。というのは敵兵のこれ程大きな殺戮は、味方にとって大きな益となったと考えたからである。実際、ボレスワフの軍勢のうちで、倒れたり、傷ついたりした者の一人は、倒れたポモジャ人の多数に相当したからである。

## (33)

Forte quidam nobilis in confinio terre ecclesiam construxit<sup>1)</sup>, : ad cuius consecracionem Bolezlauum ducem, adhuc satis puerum cum suis iuuenibus invitavit. : § Expleta est itaque consecraccio spiritalis : et subsequenter adhibita desponsacio maritalis. : § Sed utrum Deo displicuerit cum divinis nupciis carnales celebrari, : facile potest per discrimina, que sepius inde contingunt,comprobari ; : sepe namque cernimus, ubi simul ecclesie consecraccio : ac nupcialis desponsacio : fiunt, : seditiones et homicidia comitari. : § Unde constat, quia nec bonum est nec honestum talem consuetudinem imitari. : Nec istud dicimus tamen, ut nuptias condempnemus, : sed ut singula suis locis suisque temporibus reservemus. : § Cuius rei manifestum indicium in consecracione Rudensis ecclesie<sup>2)</sup> Deus omnipotens revelavit, : nam et homicidium ibi et unum de ministris ad insaniam redactum constat evenisse : et ipsos etiam desponsatos infelici connubio, sicut notum est, convenisse, : nec anniversarium<sup>3)</sup> desponsacionis implevisse. : § Sed de miraculis sileamus, : nostramque mater-

iam teneamus. : Igitur belliger Bolezlauus, convivio vel potationi militiam vel venacionem anteponens, senioribus cum tota multitudine in convivio derelictis, paucis comitantibus silvas venaturus adivit, : sed contrarius venatoribus obviavit. : § Pomorani namque per Poloniam discurrentes, predas et captivos agebant : et incendia faciebant. : At Bolezlauus belliger, sicut leo caude stimulis<sup>4)</sup> iracundia concitatus, nec principes, nec exercitum expectavit, : sed sicut leena raptis catulis<sup>5)</sup> : sitibunda sanguinis, : depredatores eorum et cursores in ore<sup>6)</sup> gladii momentaneo dissipavit. : § Cumque magis eos magisque persequi : et patrie dampnum ulcisci : niteretur, : incidit inscius in insidias, ubi dampnum inreparabile pateretur. : Ipse tamen, licet paucos, octoginta scilicet, inter pueros et iuvenes habuisset, illi vero tria milia, non fugam petivit, : nec tantam multitudinem dubitavit, : sed prima vice : cum sua parva acie : tantam hostium congeriem penetravit. : Mira dicturus sum, multisque forsitan incredibilla, : utrum presumptioni vel audacie, nescio, si fuerint ascribenda : § Cum suos pene perdidisset, : aliis interemptis, : aliis dispersis, : se quinto solummodo remansisset, : hostes confertissimos vice secunda transforavit. : Cumque tertiaro regirare voluisset, : quidam de suis, viscera equi sui per terram cadere cernens, exclamavit : : § Noli, inquit, domine, noli, iterum prelium in troire, : parce tibi, parce patrie, : equum ascende meum, melius est hic me mori, quam te ipsum, Polonie salutem interire. : § Hoc audito vix equo cadente consillio militis acquievit et sic tandem aliquantulum a campo certaminis declinavit. : Vidensque se multum attenuatum, nee Scarbimirum, milicie principem, residuis interesse, iam recuperare victoriam desperavit. : § Erat enim Scarbimirus seorsum alibi gravi wlnere sauciatus : et, quod nec siccis oculis est dicendum, dextro lumine mutilatus. : Illi autem, qui in convivio residebant, : audito, quod contigerat, exsurgentes subsidio suis laborantibus properabant. : § Advenientes vero Bolezlauum invenerunt cum paucis, admodum X X X non tamen de loco certaminis fugientem, : sed paulatim hostium fugientium vestigia subsequenter. : Sed nec hostes subsistendo pugnandi copiam dabant, : nec nostsi fatigati eos amplius infestabant : § Erant enim pagani de tanta audacia iuvenis stupefacti, quod plus laudabant eum tam parva manu talia presumpsisse, : sicque mordaciter institisse, : quam se ipsos tanto mortis dispendio tristem



victoriam habuisse. : Quis, inquietes, puer iste erit<sup>7)</sup>. : si enim diu vixerit  
 : et si plures secum habuerit, : quis ei bello resistere poterit. : § Sicque  
 pagani de dampno presenti conquerentes, : simulque timore probitatis  
 experte murmurantes, : plus honerati tristitia quam preda redierunt. : De  
 suis vero Bolezlauo sequenti die plurimi solacio iam (magis) quam auxilio  
 occurrerunt. : Advenientes autem illuc procures dolorem de dampno tante  
 nobilitatis habuerunt : et Bolezlauum de audacia tante presumptionis  
 reverenter increpauerunt. : § Filius vero Martis Bolezlauus non solum  
 aurem correctoribus non adhibuit, : nec se talia presumpsisse penituit, :  
 sed per eos se iuvandum : et de hostibus vindicandum sub testatione  
 fidelitatis ammonuit<sup>8)</sup>. : Ibi vero Bolezlaus tot ictus super lorica habuit  
 : et (super) galeam lanceis gladiisque sustinuit, : quod caro eius trita  
 multis diebus testimonium lesionis exhibuit. : § Inde quoque de sua  
 iuventute minus aliquantulum tam glorianter perempta condoluit, : quia  
 tantam stragem hostium sibi pro lucro proposuit. : Etenim pro uno de  
 peremptis vel sauciatis Bolezlai : de Pomoranis poterant plures mortui  
 computari. :

- 1) [M] この場所は明らかでないが、ボレスワフに与えられた領地の内、ボモジャ人の土地に隣接した地域であろう。おそらくそれはルブシ Lubusz の土地か、ヴィエルコポルスカ地方の西部の土地であろう。この教会の聖別式はおそらく一一〇六年に行われたと思われる。Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens* p. 60.
- 2) [P] ヴェルタ川に沿った、シェラツ Sieradz 近郊の土地。年代記作者は当時よく知られたある事件のことを示唆している。
- 3) [P] 中世には、教会の聖別式の日には、性交は許されないという信仰が広く保持されていた。ヤコブ・ヴォラギネは、次のような出来事を語っている。「近頃結婚したばかりの、トスカーナ出のある婦人が、聖セバスチャン教会の聖別式に招かれた。しかし、この式典の前夜、彼女は大きな情熱に捉えられ、自分の夫との交りを断つことができなかった。朝が来たので、彼女は式に出かけていったが……、聖セバスチャンの聖遺物が安置されている礼拝堂に入るや、悪魔が彼女に憑りついた。……ようやく、フォルトナートスという名の、たいそう敬虔な一人の男がその祈りによって彼女を救ったのである。(Jakub de Voragine, *Złota legenda, przekład polski*, J. Pleziowej. Warszawa 1983. p. 119-120. ヤコブ・デ・ヴォラギネ『黄金伝説』第一巻（一九七九年、人文書院）二六四ページ。
- 4) [M] Lucan., *De Bello civili.*, I-206. "viso leo comminus hoste……se saevae stimulavit verbere caudae." ルカーノス『内乱』一一二〇六「獅子は、敵が近くに現われたのを見て、……尾を激しく打ち振り、狂い立った。」
- 5) [M] II Liber Samuhelis, 17-8. "veluti si ursa raptis catulis in saltu saeviat." 『サムエル記下』十七ー八「彼らは子を奪われた野にいる熊のように気が荒くなって

います。」

- 6) [M] Exodus. 17-13 "fugavit Iosue Amalec et populum ejus in ore gladii." 『出エジプト記』一七—一三「ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。」
- 7) [M] Luc, 1-66. "quid putas puer iste erit," 『ルカによる福音書』一一六六「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。
- 8) [M] ティッツは、貴族とボレスワフとの間に不和・軋轢が生じたと考えている。  
[P] ボレスワフに従った若者達は、最良の貴族の出であったから、この戦でこうむった損害はこの社会層にとっては取り返しのつかない災難であった。

### 第三十四章 ボレスワフ、ボヘミア人を追い払い、 ポモジャ人を征服した。

この事件の後、ボレスワフは同じ軍勢を率いて、ポモジャ人に報復せんと決意し、行軍を開始したが、その時、ボヘミア人がポーランドに侵入するという知らせを前もって受け取った<sup>1)</sup>。そこでボレスワフの心は、まずはじめに先頃の災難に対して即座に報復すべきか、それとも侵入者に対して祖国を守るべきか、これをめぐって激しく動揺した。遂にマカベア家の模倣者として<sup>2)</sup>、軍勢を分けて祖国の守り手ともなり、また不義不正を罰する者ともなった。すなわち、軍勢の一部をポモジェに派遣し、これによって略奪と放火を働き、ポモジャ人の面目を踏み潰したのである。他方、自らは軽装の騎士達<sup>3)</sup>を率いてボヘミアに急ぎ、ボヘミア人が森から出てくるところを長い間待ち伏せていた。しかし、彼らは、ボレスワフの襲来のおわさを聞くと恐れ戦き、自ら退却していった。

#### (34) BOLEZLAUS BOHEMOS PROFUGAVIT ET POMORANOS SUBIUGAVIT

七  
九

Hoc eventum Bolezlauus cum eodem exercitu de Pomoranis se vindicare disposuit, : iamque cepta via Bohemos in Poloniam exire fama precurrens innotuit<sup>1)</sup>. Tum vero Bolezlauus in dubio magno pependit, : utrum prius de recenti contumelia se debeat continuo vindicare, : an ab invasoribus suam patriam liberare. : Tandem sicut Machabeorum imitator<sup>2)</sup>, : diviso exercitu et patrie defensor extitit et iniurie vindicator. : § Nam

partem exercitus in Pomoraniam delegavit, : que depredando (et) comburendo satis eos turpiter conculcavit ;: ipse vero cum expeditis militibus Bohemis obviam properavit, : eosque de silvis exituros diutius expectavit<sup>3)</sup>, : sed eos audita fama Bolezlai<sup>1</sup> timor animi revocavit. :

- 1) [訳注] ボヘミア人のポーランドへの侵入の時期については、グンプロヴィッチは一一〇七年のこととしているが、マレチンスキは一一〇六年の春か夏、としている。  
Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*. p.58-59. K. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p. 38.
- 2) [訳注] 『旧約聖書』『マカバイ記』に登場する、ユダヤ独立戦争における軍事指導者ユダ・マカバイ。『マカバイ記』第五章一七節以下が参照されている。
- 3) [訳注] プレジアは、この「軽装の騎士」"expeditus miles" をポーランド語で「コムニーク」"komunik" と訳した。これは、古ポーランド語の軍事用語で、輜重を持たない騎馬兵を意味した。

### 第三十五章

しかしながら、外国との平和、あるいは敵国との戦だけがボレスワフを悩ましたのではなく、内乱や、さらに悪いことに、兄弟間の憎悪がボレスワフを大いに苦しめた。すなわち、ボレスワフが前に述べた戦において、しばしの間躓いた時、ズビグニエフは、ボレスワフが幾度か勝利した時に味わった喜びよりもさらに大きな喜びを味わったのである。その明白な徴も現われていた。というのは、ズビグニエフは、異教徒から<sup>リ</sup>、その勝利の印として小さな土産を受け取った時、その使者に対して、小さな贈物へのお礼として、大きな贈物を与えたからである。また彼らがボレスワフの領土を略奪し、捕虜を奪い取った時は、ただちに彼らを野蛮人の住む島に売り飛ばしたが<sup>2)</sup>、品物であれ、人間であれ、知らずにズビグニエフの領土から奪い取ったものは、代価なしに即座に送り返したのである。

このことを聞いて、ポーランドのすべての賢人達は憤り、彼らのズビグニエフに対する気持は、友好から憎悪に変わった。そしてこのことについて互いに語り合い、様々に思案し合った。「今日まで、我等は、我が国の平和と災難とを、あるいは知らずに、あるいはそれを装ってじっと耐えに耐えてきた。しかし、今や我等の目には明らかだ。隠れていた敵が顕になり、秘密にされ

七八

ていた陰謀がその覆いをはぎ取られた。なぜなら、我等は知っており、また確信している。すなわち、ズビグニエフが、幾度も我等の面前で、ボレスワフに対して宣誓はしたが、一度でなく、三度、いやさらに多く偽りの誓いをしたことを。事実、ズビグニエフは、弟の友に対して友好を維持しなかったばかりか、弟の敵に対して、敵として振舞わなかっただけでなく<sup>3)</sup>むしろ弟の敵の友となり、友の敵となった」。さらに、ズビグニエフにとっては、約束した忠誠義務を破り、誓約した援軍を送らなかったことでは十分ではなかった。その上に、さらに弟が敵地に対して出征することを知ると、別の敵に、ポーランドに別方面から侵入するように促し、これによってボレスワフの出征の企てを挫いたのである。彼はまた、子供のように愚かな謀を聞き入れ、わずかな人々の憎悪のために<sup>4)</sup>、祖国全体を傷つけ、父祖伝来の地を敵の蹂躪にさらしたのであった。ズビグニエフは邪な謀にそのかされ、兄弟の信義は言うも愚か、誓約したことを守らず、祖国の名誉と父祖の土地を護らず、迫っている災難と危機に心を配らなかった。ああ、自らを高くしようとして、かえって破滅の淵に落ち、邪な謀の主達から<sup>5)</sup>身を高く引き離すことができなかった。それゆえ、後代の人々も今の人々も、この一件から自らを戒めてもらいたい。すなわち、王国にあっては、互いに平和にある共同統治者というものはあり得ない、ということ<sup>6)</sup>。

## (35)

Non solum autem exterorum discordia vel bellum hostium Bolezlauum aggravabat, : verum etiam sedicio civilis ymmo fraterna invidia modis omnibus infestabat. : § Eo namque bello superiori aliquantulum inclinato, : plus gaudebat Zbigneus, quam eo victoria multociens exaltato. : § Cuius rei manifestum indicium apparebat, : cum a paganis de victoria pro signo munuscula capiebat : et legatis magna pro<sup>1)</sup> parvis munera rependebat. : § Et si Poloniam depredantes de sorte Bolezlai captivos adducebant, : statim eos venundandos ad barbarorum insulas<sup>2)</sup> transportabant ; : si quid vero, vel predam, vel homines ignoranter de parte Zbignei capiebant, : illud sine precio vel dilacione remittebant. : § Unde cuncti Polonie sapientes indignati : ad odium Zbignei ex amicicia sunt redacti, : sic ad invicem inquietes, : de tali consilium sapientes : :

Usque modo patrie nostre discidium et detrimentum vel negligentes, : vel dissimulantes : per nimium sustinuimus patienter, : nunc vero hostes latentes manifestos et insidias occultas detectas cernimus evidenter. : § Scimus enim et certi sumus, quia frequenter Zbigneus Bolezlauo nobis presentibus hoc iuravit, : unde non semel, vel tercio, sed multotiens peieravit, : § quoniam nec cum amicis fratris amicitiam retinebat, : nec cum inimicis inimicitiam exercebat<sup>3)</sup> : ymmo per contrarium hostium fratris amicus et amicorum inimicus existebat. : § Et non solum ei sufficiebat fidem promissam violare, : vel iuratum auxilium non prestare, : verum etiam si fratrem ire super hostes sentiebat, : ex altera parte Poloniam intrare hostes alios incitabat : et sic eum a proposito revocabat. § Qui satis puerilie consilium et nociturum audiebat, : cum propter paucorum<sup>4)</sup> odium totam patriam offendebat, : ac paternam hereditatem conculcandam hostibus exponebat. : § Et quoniam Zbigneus malo consilio suggerente, neque fidem fratri, neque iusiurandum observabat, : nec honorem patrie nec paternam hereditatem defendebat, : neque dampnum vel detrimentum immines perpendebat, : heu, cecidit inde gravior, unde voluit exaltari : et unde non poterit amplius a suis malis consultoribus<sup>5)</sup> relevari. : § Unde posteri sibi caveant vel presentes, : ne sint in regno pares<sup>6)</sup> socii dissidentes. :

- 1) [P] 詳しい説明は与えられていないが、ガルにおいては、普通ボモジャ人を指す。
- 2) [訳注] マレチンスキもプレジアもブイノッホも、この「野蛮人の島」をリュウゲン島 Rügen と推定している。ブイノッホによれば、この時のボモジャ人の侵入は下部シロンスクとルブシ地方に向けられたものであった。
- 3) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 49-2" nam uterque cum illo graves inimicitias exercebat." サルスティウス『カティリナ戦記』四九—二「実際、二人とも彼に対して、きびしく敵対していた」。ibid, 51-16 "neque illum……gratiam aut inimicitias exercere." 同書五——一六「彼は友好的態度も敵対的態度も示さなかった」。
- 4) [P] 「わずかな人々の憎悪のために」 "propter paucorum odium." という文章は、ラテン語本文の表現様式においては、二様に解釈することができる。すなわち、1)、ズビグニエフは（名前が知られていない）わずかな人々を憎悪して、彼らだけを見殺しにして、国全体に損害を与えた。2) 名前が不明の、わずかな人々が自分の個人的な憎悪を満足させるために、ズビグニエフを唆し、国全体に損失を与える行為を彼に行わせた。次注5) においてなされる説明から見ると、この二番目の場合の方が、よりいっそうありそうな事態であろう。
- 5) [P] グロデツキは、正当にも、この言葉は——一二年のズビグニエフの破局の後に書かれたものであると述べている。さらに注意すべきは、年代記作者は、この巻の第

四一章でも、第三巻の第二章でも、ズビグニエフの「邪な謀の主」について、名前を挙げずに示唆している点である。まさに彼らこそがズビグニエフの破滅の原因を作り出したのである。作者が誰のことを想定しているのか、は今日でも不明であるが、それを、クシヴウスティの後ろ盾であり、年代記作者の後援者でもあったアヴダンツイ家に敵対する者達とする見方に支持を与えたい。

- 6) [M] 従って、ガルは二人の兄弟が、ともに王国を半分づつ継承したことについての証人である。そしてそこから、二人が身分的にも法的にも、対等であった、という事が引き出される。

## 第三十六章

さて、ボレスワフは、これらすべての事柄をただ神にのみ委ね、兄から受けたこれまでの不義不正を静かに耐え、吼える恐しき獅子のごとく<sup>1)</sup>、いつも倦むことなくポーランドを駆け回った。ある時、たまたま、ボヘミア人との国境にあるコシレという砦が<sup>2)</sup>、敵の手によってではなく、味方の手によって炎上したという知らせがボレスワフのところに届いた<sup>3)</sup>。ボレスワフには、この炎上はある者の裏切りによって起ったと思われた。そこでボレスワフは、ボヘミア人がその砦の防備を強化するためにその地へ急行するのではないかと疑って、わずかの手勢を率いてその地に飛ぶように急いだ。そして自ら率先して軍務に取りかかった。他方、ボレスワフは、自分の兵士達をかくも多く、またかくも長く、あちこちに連れ回し、彼らを疲労の極みに到らせたので、再びまた彼らをこのように突然召し出すことは不当なことのようと思われた。しかしながら、ボレスワフは自分の兵士達を援軍として呼び出し、またしかるべき使者を通じて、兄ズビグニエフに加勢を要請し<sup>4)</sup>、彼に対して、以下のような言葉を送った。「兄上、確かにあなたは、私よりも年が上で、特権も王国の領土も等しく分ち与えられている。にもかかわらず、あなたは、若い私にすべての労苦を引き受けさせ、戦にも王国統治の評議にも関与していない。それゆえ、もしあなたが私よりも高い地位につきたいと思うならば、王国のすべての監督の務と国への配慮の仕事を引き受けていただきたい。さもなければ、年は若い我正嫡であり、国の難事を身に引き受け、すべての労苦に耐えている私に対して、たとえあなたが私に役立つことはないとしても、少なくとも私の妨げにならないでいただきたい。もしあなたが<sup>5)</sup>、国事の監督を

引き受け、真実の兄弟のよしみに留まりたいと思うならば、どこでも私を、共同の評議の場に、また王国の利益のために呼び出すことができ、そこであなたは、私があなたの心からなる協力者であることを知るでしょう。しかし、あなたがこのような多くの労苦を引き受けるよりも、平穏に暮すことを願うならば、私にすべてのことを委ねていただきたい。そうすればあなたは神の慈悲によって安穏に暮すことができるのです。」<sup>6)</sup>

この言葉に対して、ズビグニエフはしかるべき回答をせず、鎖と牢獄によって使者を拘束した<sup>7)</sup>。というのは、ズビグニエフは、弟を攻撃するために自分の全軍を召集し、また同時に、彼をポーランドから追放するためにポモジャ人とボヘミア人との支持を得ていたからである<sup>8)</sup>。他方、ボレスワフは砦の防りを固めるのに忙しく<sup>9)</sup>、これらのことを知らず、カミエンニと呼ばれる場所に留まって<sup>10)</sup>、いつものやり方に従って敵陣に近い所で風聞や使者達の報告を聞いていた。また同時に敵の不意を突くすばやい戦によって敵と闘っていた。

さて、ようやく縁者の助けによって解放されたかの使者達は、ボレスワフに見たこと、聞いたことを報告した。それを聞いたボレスワフは、戦うべきか退くべきか<sup>11)</sup>、長い間熟考し、考えを決めかねていた<sup>12)</sup>。しかし、ついに気力を取りもどし<sup>13)</sup>、すばやく自分の軍勢を呼び集め、また他方では、援軍を請うためにルテニア人とハンガリア人の王に使者を派遣した<sup>14)</sup>。しかし、もし彼が自分の力によって、あるいは、彼らの力を借りて何かをするということがなければ、王国じたいも、また待ち望まれる王国への希望も失っていたであろう<sup>15)</sup>。

## (36)

Bolezlauus autem hec omnia soli Domino commendabat, iniuriamque fraternam adhuc equanimiter tolerabat, : semperque laboriosus Poloniam sicut leo rugiens metuendus circuibat<sup>1)</sup>. : Cui forte fuit interim nunciatum : Kosle<sup>2)</sup> castrum in confinio Bohemorum : a se ipso tamen non ab hostibus concrematum<sup>3)</sup> : § Qui reputans aliquem per tradicionem hoc fecisse, : dubitansque Bohemos ad illud muniendum properare, : illuc statim cum paucissimis transvolavit, : ibique laborem propriis manibus

inchoavit. : § Iam enim tantum tamque diu huc illucque cursitando suos ita fatigatos reddiderat, : quod tam subito revocare iniuriosum visum erat. : § Tamen et suos ad auxilium advocavit : et fratrem per nuncios satis ydoneos invitavit<sup>4)</sup>. : eique verba subsequenter delegavit. : Quoniam quidem frater, inquit, cum sis maior etate, : parque peneficio regnique divisione, : me solum iuniorem laborem totum subire permittis, : nec te de bellis : vel de regni consiliis : intromittis, : aut totam regni curam ac sollicitudinem sicut<sup>bb</sup> maior esse vis, obtineas, : aut mihi legitimo, licet etate minori, : onus terre sufferenti, : totumque laborem patienti, : si non prosis, saltem non noceas. : Quodsi<sup>5)</sup> curam istam susceperis : et in vera fraternitate perstiteris, : quocumque me pro communi consilio vel utilitate regni vocaveris, : me promptum ibi cooperatorem habueris. : § Aut si forte quiete vivere, : quam laborem tantum subire : malueris, : michi totum committe et sic Deo propicio tutus eris<sup>6)</sup>. : § Ad hec Zbigneus convenientem nequaquam. responsionem remandavit, : sed legatos pene vinculis et carceri mancipavit<sup>7)</sup>. : § Iam enim totum suum exercitum fratrem invasurus collegerat, : simulque Pomoranos ac Bohemos ad eum de Polonia propellendum asciverat<sup>8)</sup> : § At Bolezlauus castro munito<sup>9)</sup>, horum inscius, in loco vocabulo Lapis<sup>10)</sup> residebat, : ibique iacens more solito vicinior<sup>y</sup> et rumores et legationes audiebat, : ac velocius ex improviso suis hostibus occurrebat. : Legati tandem vix amicorum subsidio liberati : ad Bolezlauum nunciantes que viderant et audierant, sunt reversi. : § Quo audito Bolezlauus an resistat, an desistat<sup>11)</sup> diu dubitans hesitavit<sup>12)</sup>, : sed reversus ad cor suum<sup>13)</sup> quantocius suum exercitum congregavit : et ad regem Ruthenorum Vngarorumque pro auxilio delegavit<sup>14)</sup>. : Sed si per se vel per ipsos nichil agere potuisset, :

Ipsam regnum et spem regni expectando perdidisset<sup>15)</sup>.

1) [M・P] I Petri 5-8. "diabolus tamquam leo rugiens circuit quaerens quem devoret." 『ペトロの手紙一』 五―八「悪魔が、はえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」

2) [P] シロンスク地方における、オドラ川に沿った砦。

3) [M] コシレの砦は、一一〇六年の、おそらくその夏に放火によって消滅した。カドゥベックは、そこに駐留していた兵士の怠慢によって炎上した、と述べている(Kadłubek, *MPH* II, p. 317.)。

4) [訳注] マレチンスキによれば、この時のボレスワフの要請は、ズビグニエフに、統



治の優越権を認めるものであった。その具体的内容は、外交権、弟に対する優越した地位、軍隊命令権、司教叙任権、官吏任命権等であった。Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*, p. 39.

- 5) 〔訳注〕プレジアによれば、この接続詞“quodsi”は、古典期のラテン語に固有の言葉であるが、作者の文体は、全体としては、古典期ラテンの混合体である。Plezia, *Gall*, p. 98.
- 6) 〔訳注〕グロデツキは、この手紙の意図を、ボレスワフによるズビグニエフへの挑戦であるとし、手紙の調子が無礼で軽蔑的なものであったとしている。Grodecki, *Zbigniew*, p. 102.
- 7) 〔M〕“vinculis et carceri mancipare”「鎖もて投獄する」という表現は、テオドシウス法典に依っている。Balzer, *Stydium o Kadubku*, T. 1, Lwów 1934. p. 461.
- 8) 〔M〕グロデツキによれば、ズビグニエフは、ボレスワフとの戦の準備をしていなかったとされている。Grodecki, *Zbigniew*. p. 102.
- 9) 〔M〕この牦をグロデツキはコシレ Koźle の牦としている。Grodecki *Gall*, p. 131.
- 10) 〔P〕おらそら、シロンスク地方のオポレ近郊のカミエンニであろう。
- 11) 〔M〕二連の八音節トロカイックの詩。Pohorecki, *Rytmika*. p. 48.
- 12) 〔M〕Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 107-6. “dubio atque heaesitante Iugurtha” サルスティウス『ユグルタ戦記』一〇七―六「ユグルタは狐疑逡巡して」。
- 13) 〔M〕Baruch, 20-30. “et convertetur ad cor suum in terra captivitatis suae.” 『バルク書』二―三〇「しかしお前たちは、捕われの地で本心に立ち帰り」Iesu Filii Sirach. 21-7 “Qui timet Deum convertet ad cor suum.” 『ベン・シラ書』二―六「主を畏れる者は心の底から主に立ち帰る。」
- 14) 〔M〕キエフ公シフィエントペウク。ズビスワヴァの父。ハンガリア王はコロマン一世。
- 15) 〔M〕二連の八音節トロカイックの詩。Pohorecki, *Rytmika* 48.

## 第三十七章

さて、勇敢なボレスワフは、三つの軍勢に囲まれた時、最初にどの軍勢を待ち受け、またどれに攻撃を仕掛けるべきか、を思案した。それは、あたかもモロシヤ犬によって発見された獅子や猪が犬の吠え声や獵師の嗷吠の音に激しく猛り狂う姿に似ていた。しかし敵の兵士達はすべてボレスワフを非常に恐れていたもので、彼が囲みの真中に立った時、彼らは定められた場所に敢えて結集しようとしなかった。その時、ズビグニエフの手紙と捕えられた彼の使者がボレスワフのもとに届けられたが<sup>2)</sup>、その手紙は、多くの裏切りと陰謀の跡を示していた。その手紙を読んだ賢人達は、皆驚愕し、民衆は危険が迫っていると思って慨嘆した。しかしボレスワフは、賢明にも、また適切に

も、一時的にボヘミア人と和を結び<sup>3)</sup>、軍勢を激しく駆り立てて、まずズビグニエフを滅ぼそうと決意した。他方、ズビグニエフの方は、ボレスワフと戦を交えようとしてその到来を待ち受けるということもなく、また砦や都市に拠って決然として彼の攻撃を妨げるというのでもなく、鹿のように逃げ出して、ヴィスワ川を渡った<sup>4)</sup>。

## (37)

Igitur belliger Bolezlauus tribus exercitibus circumdatus<sup>1)</sup>, : quos prius expectet, vel in quos irruat, meditatur, : sicut leo vel aper molosis canibus indagatus : latratibus canum : tubisque venatorum : ad iracundiam provocatur. : § Sed omnes tantum Bolezlauum metuebant, : quod eo stante medio, ad locum determinatum convenire non audebant. : § Interim autem Zbigneui littere capte : cum nuntiis sunt allate<sup>2)</sup>, : quibus multe tradiciones et insidie sunt prolate. : § Quibus lectis, quisque sapiens admiratur, : totusque populus pro periculo lamentatur. : Ad extremum vero Bolezlauus sapienter satis ac convenienter pro tempore pacem cum Bohemis federavit<sup>3)</sup>, : ac exercitu concitato Zbigneum eliminare disposuit. : Zbigneus vero non fratris adventum eadem facturus : vel bellum commissurus : ex (pectavit), : nec castris securus, : nec civitatibus : retardavit, : sed fugiens velud cervus Wyslam fluvium transnavit<sup>4)</sup>. :

- 1) [P] 「三つの軍勢」、すなわち、ズビグニエフ、ポモジャ人、チェコ人の軍勢。
- 2) [M] この手紙は——〇六年、秋に奪われた。
- 3) [訳注] グンプロヴィッチは、この協定の締結の時期を——〇七年の秋としているが、マレチンスキによれば、それはその前年、すなわち——〇六年になされたこととされている。——〇六年の秋、ボレスワフは、チェコの内紛において一方の有力侯シフィエントポウクを支持していたので、他方の有力侯ボジヴォイの攻撃を受け、またその時同時にポモジャ人とズビグニエフの侵入に直面していた。そこでボレスワフはこの危機に対処するため、ズビグニエフと妥協し、ボジヴォイと和平を結ぶ。Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*, p. 62. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*, p. 41.
- 4) [M] ボレスワフのズビグニエフとの戦は、ルテニアの年代記作者の言及にもとづけば、——〇六年の秋か——〇七年の初頭の冬に行われた。Maleczynski, *Bolesław Krzywousty*, p. 41. Grodecki, *Zbigniew*, p. 102.

## 第三十八章 ズビグニエフは弟と和解した

さて、ボレスワフは、急いでカリシュに到着した時<sup>1)</sup>、ズビグニエフに忠実な者達の抵抗に出会った。しかし、二・三日で彼らの砦を占領し、使者を受け入れたあとで、自分の伯をグニエズノの都市に任じた。そこからさらに前進して、スピティミルで<sup>2)</sup>老司教を幽閉したが<sup>3)</sup>、彼の司教座の明け渡しの知らせを聞いて、ようやく彼を釈放した。しかしボレスワフは、司教を自分に随行させ、さらにウェンチツァに移された司教座へ急いだ<sup>4)</sup>。そこでボレスワフは、マゾフシェ人に対抗するために古い砦を修復した<sup>5)</sup>。ようやくその時になって、ルテニア人やハンガリア人の援軍が集合してきたので、ボレスワフは彼らとともに前進し、ヴィスワ川を渡った。他方、その時ズビグニエフは、絶望に陥り、ルテニア人の公ヤロスワフとクラコフ司教ボルドウィン<sup>7)</sup>の調停によって、弟への償いと臣従とを受け入れるように促された。その時はじめてズビグニエフは、自分が弟より低い地位にいることを認め、また、再び決して弟に反抗しないこと、すべての事柄において弟に服従すること、さらにガルの砦を<sup>8)</sup>破壊することを居並ぶすべての者の前で誓った。またズビグニエフは、その時、弟から、君主としてでなく、騎士としてマゾフシェの領有を認められた<sup>9)</sup>。こうして兄弟が和解したので、ルテニア人とハンガリア人の軍勢は自分の国に帰っていった。他方、ボレスワフはポーランド中を、自分の好みにまかせて歩きまわった<sup>10)</sup>。

(38) ZBIGNEUS REDIIT IN GRACIAM  
FRATRIS

At Bolezlauus festinanter Calis adueniens<sup>1)</sup>, ibique quosdam fideles Zbigneui sibi resistentes inueniens, paucis diebus et illud castrum obtinuit : et accepta legatione suum comitem in Gnezdensi civitate constituit. : Inde progrediens in Spitimir<sup>2)</sup>, senem fidelem inclusit<sup>3)</sup>, : quem audita fama sue sedis reddite vix exclusit. : § Quo secum assumpto ad Lucic sedem translata<sup>4)</sup> properavit, : ibique vetus castellum contra Mazouiam reparavit<sup>5)</sup> : Tum primum Ruthenorum auxilium et Vngaror-

七〇

um commeavit, : cum quibus iter arripiens, Wyslam fluvium transmeavit.  
 : Tum vero Zbigneus in desperationem est redactus, : ac Yaroslauo<sup>6)</sup>  
 duce Rutheno : simulque Balduino Cracouiensi episcopo<sup>7)</sup> : mediantibus,  
 ante fratrem satisfactorius et obediturus est adductus. : Tunc primum  
 inferiorem se fratre reputavit, : tunc iterum se numquam fratri fore  
 contrarium, sed in cunctis obediturum : et castrum Galli<sup>8)</sup> destructurum, :  
 coram omnibus adiuravit. : Tunc a fratre Mazouiam retinere sicut miles,  
 non ut dominus impetravit<sup>9)</sup> : § Pacificatis itaque fratribus Ruthenorum  
 exercitus et Vngarorum ad propria remeavit, : Boleslauus vero per  
 Poloniam quocumque sibi placuit, ambulavit<sup>10)</sup> :

- 1) [B] ポズナニ南東、ピエルコボルスカ地方のカリシュ。
- 2) [P] スピチミシ Spycimirz (後にスピチミエシ Spicymierz)。ヴァルタ川に沿った町で、カリシュからウェンチツァへの道の中程に位置している。
- 3) [訳注] グニエズノの大司教マルチン。T・ヴォイチェホフスキ、St・ザグジェフスキ、グロデツキ、マレチンスキは、マルチンがズビグニエフ陣営に左袒していた、と主張している。さらにザグジェフスキ、マレチンスキによれば、マルチンは、ローマ教皇座のグレゴリウス改革にも距離を置いていた、とされている。Tyc, *Zbigniew*, p. 30. Grodecki, *Zbigniew*, p. 102, Maleczynski, *Bolesław Krzywousty*, p. 189.
- 4) [訳注] ウェンチツァ Łęczyca は、ヴィスワ川の支流ブズラ川 Bzura に沿った城塞。"Sedem translata"「移された司教座」の意味について、プレジヤは、今日まで説得力のある説明は与えられていない、としている。ポーランドの若干の教会史家は、当時のウェンチツァにはすでに司教座が、またボレスワフ・フロプリの時代には、大司教座が存在していた、と主張している。Słownik Starożytności Słowiańskich, T. 3, Ł-L, p. 117. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*, p. 189.
- 5) [訳注] グロデツキは、テキストのこの箇所に破損を見ている。Grodecki, *Gall*, p. 132.
- 6) [訳注] ヴォウィン公ヤロスワフ。ボレスワフ・クシヴウスティの義理の兄弟であり、キエフ公シフィエントベウクの息子。『ロシア原初年代記』一一〇六年の項に、「同年、ズビグニエフがスヴァトポルク (シフィエントベウク) のもとに逃げてきた。」とある。(『ロシア原初年代記』、三〇四ページ。グンプロヴィッチによれば、ズビグニエフは、シフィエントベウクの娘マリアを妻として迎えている、とされる。Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*, p. 61.
- 7) [P] クラコフ司教バルドウィン。在位一一〇三年から一一〇九年まで。
- 8) [P] この場所については意見が分かれている。ある人々は、ガルス Gallus という名を固有名詞と考えて、その場所をガウウォフ Gawłow (ソハチェク近くの) と同一視しているし、またある人々は、ラテン語のガルス Gallus の意味、—— おんどり、めんどりから考えて、クゼウォフ Kurzelów (ピリツァ近くの)、あるいはクルフ Kurów (プワヴィ近くの) を想定している。それは、クシヴウスティの手に落ちた土地からの攻撃に対して、マゾフシェを守る砦であったにちがいない。
- 9) [訳注] この協定の成立時期については、グンプロヴィツは、一一〇七年の夏の終り

であったとしているが、マレチンスキは一一〇七年の初頭であった、としている。  
 Gumpłowicz, *Zur Gesch. Polens*. p. 63. Maleczyński, *Bolesław Krzywousty*. p. 41.  
 10) [M] この平穩の時期は、一一〇七年の春から秋までの時期である。

### 第三十九章 弟に対するズビグニエフの背信

再び冬がめぐってきた時<sup>1)</sup>、ポーランドの兵士達は、ポモジェに攻め入るために再度召集された。というのは、沼が氷結した時の方が、容易に砦を占領できるからである。さて、この時もまたボレスワフは、ズビグニエフの背信を味わった。というのは、彼が誓ったすべての事柄が、明らかに偽誓であることが判明したからである。ズビグニエフは、ガルが築いた砦を速やかに破壊しなかったし<sup>2)</sup>、弟への援軍を請われた時、一部隊も差し出さなかった。しかし北の公は<sup>3)</sup>、ズビグニエフのこのような挙動にしばらくの間は心を乱していたが、兄を信頼せず、神に信を置いて自分の企てを放棄しなかった。

さて、火を吐く龍が、ただの一息で近くのを焼き尽し<sup>4)</sup>、焼き尽せないものは尾を振って打ち壊し、大地に災いを撒き散らしながら飛び回るように、ボレスワフは、ポモジェに攻め入って、反抗する者は鉄で打ち、砦には火を放ってこの地を打ち壊した。しかしながら、ボレスワフがこの土地を駆け巡ってなし遂げたことは、今は省略し、この土地の中央に位置するアルバの都市<sup>5)</sup>の包囲の話にとりかかるとしよう。

ボレスワフは、この地方の中核の地と考えられているこの都市に到着すると、ただちに陣営を張り、より容易に、またより危険のないやり方で城を占領できるように城攻めの機械を配置した。これらの機械を組み立て、武器と計略を用いて断え間なく攻め立てたので、二・三日でその市民にその都市を引き渡すことを強いることができた。ボレスワフは、この都市を占領し、そこに自分の騎士達を任じ、ボレスワフの印を与え、その後、陣を引き払って、海岸地方へと急いだ。そしてボレスワフはコウォブジェグ<sup>6)</sup>に向けて兵を進めたが、その都市に入る前に、海に近い砦を攻め落とすことを思い立った<sup>7)</sup>。その時、見よ、都市の市民と守備兵が首を傾けてボレスワフの前に進み出て、自分達の身柄を差し出し、忠誠を誓い、奉仕を申し出た。さらにポモジャ人

の公も<sup>8)</sup>、ボレスワフの前に姿を現わして、彼に臣従を誓い、馬上にある者<sup>9)</sup>への奉仕と軍役奉仕を申し出た。

こうしてボレスワフは、五週間、戦闘を捜し求めてポモジャ人の地を駆けめぐったが、この王国のほとんどすべてを戦なしに従えることとなった。それゆえ、ボレスワフは、大いなる賛辞によって称えられるべきであり、大いなる勝利によって飾りたてられるべきであろう。

### (39) ZBIGNEI PERFIDIA ERGA FRATREM

Rursus hiemali tempore<sup>1)</sup> Pomoraniam invasuri Poloni congregantur, : ut facilius municiones congelatis paludibus capiantur. : § Tunc quoque Bolezlauus Zbignei perfidiam est expertus, : quia in hiis omnibus periurus manifeste, que iuraverat, est repertus. : Qui propere castrum, quod Gallus fecerat<sup>2)</sup>, non destruxit, : nec in fratris auxilium invitatus, unam solam aciem vel instruxit. : Dux vero septentrionalis<sup>3)</sup> conturbatus aliquantulum ex hac arte, : suum tamen non dimisit propositum, cor habens in Domino non in fratre. : § Igitur sicut draco flammivomus solo flatu vicina comburens<sup>4)</sup>, : non combusta flexa cauda percuciens, : terras transvolat nociturus, : sic Bolezlauus Pomoraniam impetit, ferro rebelles, : igne municior es : destructurus. : § Sed quid eundo per terram vel transeundo egerit obmittamus : et in medio terre civitatem Albam<sup>5)</sup> obsidendam adeamus. : § Adveniens itaque Bolezlauus ad urbem, que quasi centrum terre medium reputatur, : castra ponit, instrumenta parat, quibus levius et minori periculo capiatur. : Quibus paratis assidue armis et ingeniis laboravit, : quod paucis diebus urbem cives reddere coartavit. : § Qua recepta suos ibi milites collocavit, : signoque dato motisque castris, ad maritima properavit. : § Cumque iam ad urbem Cholbreg<sup>6)</sup> declinaret : et castrum mari proximum<sup>7)</sup> expugnare, priusquam ad urbem accederet, cogitaret, : ecce cives et oppidani pronis cervicibus obviam Bolezlauo procedentes, : semet ipsos et fidem et servicium proferentes, : § ipse quoque dux Pomoranorum<sup>8)</sup> adveniens Bolezlauo (se) inclinavit, eiusque residentis<sup>9)</sup> equo se servicio et milicie deputavit. : § Quinque autem Bolezlaus ebdomadis expectando bellum vel querendo per Pomoraniam equitavit, : ac totum pene regnum illud sine prelio subiugavit. :

Talibus ergo Bolezlauus preconiorum titulis est laudandus, ⁘ talibusque bellorum ac victoriarum triumphis coronandus. ⁘

- 1) [M] 一一〇七年の十一月か十二月。
- 2) [訳注] 前章、注(8)を参照。
- 3) [P] この章から以後、「北の公」という名前で、年代記作者はボレスワフ・クシヴスティを呼んでいる(第三巻、第十四章、第十七章、第二十五章、第二十六章)。それ以前は、「マルスの子」という渾名で呼んでいる。
- 4) [M] Deuteronomium, 8-15, "erat serpens flatu adurens."『申命記』八一十五「息で物を焼き尽す蛇」(『ウルガータ聖書』訳)。六六  
[訳注] プレジアは、この龍の譬は、中世においてよく見られたものであるとし、例として、十二世紀後半、ベックの修道院の修道士ルーヴァンのステファンの手になる韻文のノルマン史『ノルマンの龍』を挙げている。M. Plezia, *Kronika Galla*.
- 5) [P] ボモジェ地方のピアウォガルド。
- 6) [M] バルト海に面した都市コウォブジェグ。
- 7) [訳注] グンプロヴィッチによれば、この砦は、コウォブジェグとは別の城砦であった、とされる。
- 8) [訳注] 第二十八章に登場するボモジェ公と同一の人物であると考えられている。Plezia., *Maleczyński*.
- 9) [訳注] 「馬上にある者」という訳については、プレジアは異論を唱えている。テキスト本文は、ザモイスキ版、センジヴォイ版、ヒルデスハイム版のいずれも"residens equo"となっており、これに従えばプレジアのポーランド語訳のように「馬上にあって」の訳が正しいであろう。しかしこのプレジア訳では、馬上にある者がボモジェ公となり、本訳とは逆の意味になってしまう。すなわち、ボモジェ公が馬上にあって、徒歩のボレスワフに忠誠を誓うという叙述になる。しかし、それはグロデツキも指摘しているように、普通の忠誠誓約の形式に反していると思われるので、やはり、マレチンスキのようにテキストを修正して訳す方がこの章のコンテキストに適していると思われる。

*Anonim tzw. Gall Kronika polska*, B. N. 1982. p. 104.

## 第四十章

しかしながら、この凱旋的な勝利の喜びに加えて、王族の血統からボレスワフに息子が生まれた時<sup>1)</sup>、さらに大きな喜びが生じたのであった。願わくば、この少年が、年月とともに大きく成長し、高潔な士となり、勇敢な行いに秀いできるように。

しかし、始められた本筋の話を続けるならば、我々には父親のことだけで十分であろう。

## (40)

Sed cum isto gaudio de victoria triumphali : exortum est maius  
gaudium orto sibi filio<sup>1)</sup> progenie de regali. : Puer autem etate crescat, :  
probitate proficiat, : probis moribus augeatur, : de patre autem nobis  
sufficiant, : si cepta materia teneatur. :

- 1) [P] ボレスワフ・クシヴウスティのこの息子について、年代記作者は、クシヴウスティの長子であるかの如く語っているため、彼を後のヴァディスワフ二世(クシヴウスティの長子)と見なすべきだとする理解も生じた。しかし、諸々の年報にもとづけば、ヴァディスワフ二世はすでに一一〇五年に生まれており、他方、『ガル年代記』は、ここでは、一一〇七年の諸事件について物語っている。従って、ガルは、この箇所では、ボレスワフとズビスワヴァの、おそらく早逝した別の息子のことを語っているのではないかと思われる。

## 第四十一章

さて、ボレスワフは、誓約されたすべての事柄に、兄が少しも誠実な態度を示さなかったのを見て、また彼が国全体にとって有害で邪悪な者として<sup>1)</sup>立ち上がったので、彼をポーランドから追放し<sup>2)</sup>、さらにルテニア人とハンガリア人の加勢を得て、ボレスワフに反抗した者や、国境の砦を守備する者を<sup>3)</sup>、打ち滅ぼした。

こうして邪悪な顧問官達<sup>4)</sup>によるズビグニエフの支配は終焉を迎え、ポーランド王国全体がボレスワフの支配の下に統一された。そして、冬の季節に<sup>5)</sup>このような事を行うことは、多くの者にとって十分に労苦に価した。しかしボレスワフは、王国に利益と名誉をもたらすと思われる場合には、いかなる事も荷が重いとは考えなかった。

## (41)

Videns igitur Bolezlauus, quia frater in omnibus et promissis et iuramentis fidei nullius existerat : et quoniam toti terre noxius et obnoxius<sup>1)</sup> obsisterat, : eum de toto regno Polonie profugavit<sup>2)</sup>, : sibique resistentes : et castellum in terre confinio<sup>3)</sup> defendentes, : cum auxilio



Ruthenorum et Vngarorum expugnavit. : Sicque dominium Zbigneui malis consiliariis<sup>4)</sup> est finitum, : totumque regnum Polonie sub Bolezlau domini cunctum. : § Et cum ista brumali tempore<sup>5)</sup> peregris multis sufficeret ad laborem, : Bolezlauus tamen nichil grave reputat, : ubi regni proficuum augmentari noverit vel honorem. :

- 1) [訳注] プレジアは、“noxius et obnoxius.”という表現について、類似の音声を配置した頭韻法が用いられている、と指摘している。Plezia, *Kronika Galla*, p. 118.
- 2) [訳注] この点については、Tyc, *Zbygniew* p. 27. Grodecki, *Zbigniew*, p. 104. 『ヴィエルコポルスカ年代記』においては、ボレスワフは、残されたズビグニエフの妻や一族の者達に一定の所領を与えたとされている。“Cujus calamitati et plus uxori et liberorum defectibus, post tempus non longum, Boleslaus rex benigne compatiens, sibi quasdam haereditates uti fruendas concessit.” *Kronika Boguchwała* in *M.P.H* t. II p. 498.
- 3) [訳注] 「国境の砦」について、プレジアは、三十八章に言及されているガルの砦を指すとしているが、マレチンスキ、ブイノッホは、プヴァヴィ近郊のクルフ Kurów を想定している。Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p. 44.
- 4) [P] 第三十五章の注5) を参照。
- 5) [M] 一〇七〇年から一〇八〇年の冬にかけての時期。

## 第四十二章

それからボレスワフは、非常に野蛮な土地プルズに攻め入った<sup>1)</sup>。そして多くの戦利品を略奪し、火を放ち、多くの捕虜を捕えた。ボレスワフは戦を求めたが、それに会うことなく国に帰った。しかし、この土地について、たまたま言及することになったので、長老達の話から<sup>2)</sup>若干のものをここに付け加えても不当ではないであろう。

すなわち、フランク族の大王カールの御代<sup>3)</sup>、サクソニア人は大王に反抗し、彼の支配の軛も、キリスト教の信仰も受け入れず、そのため船でサクソニアの地を出て、この地方を占領し、この土地の名を受け取ったのである<sup>4)</sup>。それ以来その土地は、王もなく、法もない状態が続き<sup>5)</sup>、当初からの異教と野蛮を離れることがなかった。他方、この土地には、湖と沼とが至るところに点在しているので、砦や城によって守られる必要がなかった。それゆえ、今まで誰もこの土地を征服することができなかった。というのは、誰も軍勢を率い

てこれ程の湖と沼を渡ることはできなかったからである。

## (42) SAXONES NAVIGIO VENERUNT IN PRUSSIAM

Igitur in Prusiam, : terram satis barbaram, : est ingresus<sup>1)</sup>, : unde cum preda multa factis incendiis, : pluribusque captivis, : querens bellum nec inveniens, est reversus. : § Sed cum forte contigerit regionem istam in mencionem incidisse, : non est inconueniens aliquid ex relatione maiorum<sup>2)</sup> addidisse. : § Tempore namque Karoli Magni<sup>3)</sup>, Francorum regis, cum Saxonia sibi rebellis existeret, : nec dominacionis iugum nec fidei christiane susciperet, : populus iste cum navibus de Saxonia transmeauit : et regionem istam et regionis nomen occupavit<sup>4)</sup>. : § Adhuc ita sine rege, : sine lege<sup>5)</sup> : persistunt, : nec a prima perfidia vel ferocitate desistunt. : Terra enim illa lacubus et paludibus est adeo communita, : quod non esset vel castellis vel civitatibus sic munita ; : unde non potuit adhuc ab aliquo subiugari, : quia nullus valuit eum exereitu tot lacubus et paludibus transportari. :

- 1) [P] プルスは、当時、ヴィスワ川下流とニエメン川下流の間に横わる土地であった。クシヴウスティのプルスへの侵入は、おそらく一〇八八年の初めの頃、ズビグニエフをマゾフシェから追放した後に行われた。
- 2) [M] これらの言葉から、ガルがある伝承をこの箇所に書き込もうとしたと考えることもできるが、この伝承がポーランドに由来するものであるか否かは、不明である。
- 3) [P] フランク王カール大帝（七六八―八一四）。八〇〇年からローマ皇帝。当時、異教を信じていたサクソニア人と長期にわたる戦争を行い、彼らを打ち負かして、キリスト教に改宗しようと企てた。
- 4) [P] 作者は、プルスの住民をサクソニア人から由来したもののように描いているが、これは疑いもなく誤っている。というのは、プルスの古語が示しているように、彼らはバルト・スラブ語族であって、血統的にはリトワニア人やヤジヴング人と最も近い。しかしわが『ガル年代記』より後のドイツの史料は、同じように、サクソニア人のプルスへの避難の伝承を語っている。  
[M] プルスに渡るサクソニア人についての伝承は、『ザクセンシュビーゲル（第三卷第四十四章第二項）』、『ザクセン世界年代記』の九一七年の項、『スターデン年代記』も言及している。
- 5) [P] “sine rege sine lege” の表現は、頭韻法を踏まえている。

## 第四十三章 ポモジャ人についての奇跡

さて、今はブルス人を野獣のところに残しておき、理性を与えられた者達に<sup>1)</sup>、一つの話、否、神による一つの奇跡の話を語ろうと思う。

ある時、ポモジャ人がたまたまポモジェから兵を出し、いつものやり方に従って戦利品を奪い、ポーランド中を荒し回ることがあった<sup>2)</sup>。彼らは四方に分れて散開し、彼らのすべての者が災いを与え、邪悪なことを行ったが、ある者は、さらに大きな冒瀆へと突き進んだ<sup>3)</sup>。というのは、大司教座そのものと聖なる教会を犯したからである。すなわち、信仰厚き老人、グニエズノの大司教マルティンは、スピチミンにある自分の教会で<sup>4)</sup>、ミサを開こうとして司祭とともに告解の式をとり行なっていた。また、他の場所に赴くべく、馬に鞍を置いて自分の旅行の準備をさせていた。それゆえ、もしも、外に立っていた下僕の一人がポモジャ人の軍勢を見つけ、教会の入口に駆け込んで、すぐそこにポモジャ人が来ている、と叫ばなかったら、疑いもなくそこにいた人々はすべて殺害されていたであろうし、あるいは一家の主人たる者も奴隷のように鎖にしばられて売り払われてしまっていたであろう。その時、司教、司祭、助祭長は<sup>5)</sup>、非常に驚き、この世の生についての望みを捨てなければならなかった。どのような手立てを講ずべきであったのか。何をなすべきであったのか。どこへ逃げればよかったのか。一つの武器もなく、従者の数も少ないのに、敵が戸口に迫っており、またいっそう危険なことに、木造りの教会がまさに彼らを焼き尽くそうとしていた<sup>6)</sup>。その時、出口を通して外に出た助祭長は、屋根付きの回廊<sup>7)</sup>を通して馬のところにたどりつこうとし、そうすれば逃げ去ることができると思ったのである。しかし救いの場を棄てて救いを求めたため、救いから逸れてしまった。というのは、助祭長は、まさにそこに突進してきたポモジャ人と出くわしてしまったからである。異教徒は彼を捕え、彼を大司教と思って大いに喜び、荷車に乗せ、縛らず、むち打たず、敬意を払いつつ監視した。その間、大司教は、誓願と祈りによって神に身を捧げ、胸で十字の印を切っていたが、若者でも登るのをためらう所に、この老人は身を打ち震わせながらも、何のためらいもなくよじ登った<sup>8)</sup>。驚くべき事を言うようであるが、老年というものが否定していた力を、死の

危険と突然の恐怖が引き出したのである<sup>9)</sup>。他方、司祭は、ミサを行う準備をしていたので、祭壇の後に身を隠し、こうして大司教と司祭の二人は、神の恵みにより、敵の手から逃がれることができた。すなわち、厳かな神の御力がこのようにして教会に突入した異教徒を盲目にしたので、彼らのうち誰も上に登ることも、祭壇の後を見ることも考えつかなかったのである。しかし、彼らは、旅行用の大司教の祭壇<sup>10)</sup>と教会の聖遺物を持ち去り、ただちにそれらといっしょに捕えた助祭長を連れて立ち去っていった。しかし全能の神は、大司教と司祭と教会とを救ったように、後に聖遺物とすべての聖なる品々を、汚れも傷もないままに大司教のもとに送り返したのである。というのは、異教徒のうちで聖遺物や聖衣、あるいは聖なる器を持ち去った者には、誰であれ、癡癡と恐ろしい狂気が襲いかかったからである。それゆえ、神の偉大な力に驚いた人々は、すべての物を捕われの身の助祭長に返却せざるを得なかった。また助祭長自身も無傷のまま元気にポモジェから帰ったので、大司教は自分のものがすべてこのように手元に返ってきたのを見て、奇しき神を、その業の故に誉めたたえた<sup>11)</sup>。その日からポモジャ人は次第に滅びに向い、またその後敢えてポーランドを荒し回ることにはなかった。

### (43) MIRACULUM DE POMORANIS

Nunc autem Pruzos cum brutis animalibus relinquamus : et quandam relationem rationis capacibus<sup>1)</sup> ymmo Dei miraculum referamus. : Contigit forte Pomoranos de Pomorania prosilisse, : eosque more solito predam capturos per Poloniam discurrisse<sup>2)</sup>. : § Quibus dispersis et discurrentibus : per diversa, : cunctisque mala facientibus : et perversa, : quidam tamen eorum ad maiora scelera proruperunt<sup>3)</sup> : quod metropolitanum ipsum et sanctam ecclesiam invaserunt. : Igitur Martinus, archiepiscopus Gneznensis, : senex fidelis, : Spitimir in ecclesia sua<sup>4)</sup> confessionem cum sacerdote missam auditurus faciebat, : suamque viam insellatis iam equis alias iturus disponebat. : § Sicque procul dubio simul omnes ibidem aut fuissent iugulati, : aut pariter dominus sicut servus captivitatis vinculis mancipati, : nisi quidam de ministris foris astantibus, armis eorum recognitis, ad ecclesie ianuam properaret, : iamque presentes adesse Pomoranos exclamaret. : § Tum vero presul, sacerdos,

archidiaconus<sup>5)</sup> tremefacti : de vita temporalis iam desperare sunt coacti.  
 : § Quid consilii caperent, : vel quid agerent, : vel quo fugerent. : § Arma  
 nulla, clientes pauci, hostes in ianuis, et quod periculosius videbatur, :  
 ecclesia lignea ad comburendum eos paratior habebatur<sup>6)</sup>. : Tandem  
 archidiaconus per ostium exiens, per solarium coopertum<sup>7)</sup> ad equos ire  
 volebat : et sic evadere se putabat. : Sed salutem deserens : et salutem  
 querens, : a salute deviavit, : quia Pomorani illuc irruentibus obviavit. :  
 § Quo capto, pagani putantes archiepiscopum esse gavisii sunt vehementer,  
 : quem positum in vehiculo non ligant, : non verberant, : sed custodiunt  
 veneranter. : § Interim autem archiepiscopus Deo se votis et precibus  
 commendavit, : seque crucis sacro signaculo consignavit : nec, ubi nisi  
 iuvenis (non) dubitaret, illuc scandere senex tremulus dubitavit<sup>8)</sup>. : §  
 Mirabile dictu, vires, quas etas senilis denegavit, : periculum mortis  
 timorque subitaneus ministravit<sup>9)</sup>. : § Presbiter vero, sicut erat paratus, se  
 post altarium reclinavit : et sic uterque presul et sacerdos Deo iuvante  
 manus hostium evitavit. : § Nam paganos in ecclesiam irrumpentes ita  
 divina maiestas excecavit, : quod nullus eorum vel sursum ascendere, :  
 vel post altare respicere : ad memoriam revocavit. : § Qui tamen archie-  
 piscopi altaria viatica<sup>10)</sup>, ecclesieque reliquias abstulerunt, : statimque  
 cum eis et cum archidiacono, quem ceperant, abierunt. : Sed Deus om-  
 nipotens sicut presulem, sacerdotem et ecclesiam liberavit, : sic reliquias  
 postea totumque sanctuarium incontaminatum et inviolatum archiepis-  
 copo restauravit : Quicumque enim paganorum reliquias, vel sacras  
 vestes, vel vasa sanctuarii possidebat, : vel caducus eum morbus vel  
 insania terribilis agitabat ; : unde Dei magnificencia tremefacti, : captivo  
 archidiacono cuncta reddere sunt coacti. : § Ipse quoque sanus et in-  
 columis archidiaconus de Pomorania remeavit, : sicque suis omnibus  
 restauratis archiepiscopus Deum mirabilem in suis operibus collaudavit. :  
 Ex ea die Pomorani paulatim incipiunt annullari, : nec ita sunt ausi  
 postea per Poloniam evagari. :

六〇

- 1) [訳注] プレジアは、この表現の中に、ホエチウスを介する、西欧中世へのペリパトス派の人間の定義 ("homo est animal rationis et scientiae capax." 『人間は、理性と学知を持った動物である。』) の影響を見ている。
- 2) [P] おそらく一〇〇八年の春の頃であろう。

- 3) [M] Esth. 16-5 "in tantum vesaniae proruperunt." 『エステル記』 十六ー五「これ程大きな狂乱へと突き進んだ。」(『ウルガータ聖書』に依った。)
- 4) [訳注] 第二卷第三十八章注2)を参照。
- 5) [P] "archidiaconus" —— 助祭長は、教会の要職であり、特定の教区における裁判権を持つ。この箇所は、ポーランドにおける助祭長に関する最古の記述である。  
[訳注] ドゥゴージの『歴史』第四卷、一〇〇九年の項は、ほぼこのガルの記述を元にしていて、助祭長にニコラウスの名を与えている。Dłógosz, *Annales*, Liber IV, p. 231.
- 6) [P] プレジアによれば、短文節による文章表現の技巧は、文意の火急性、危険性を表現している。  
Quid consilii caperent?  
vel quid agerent?  
vel quo fugerent?  
Arma nulla  
clientes pauci  
hostes in ianuis  
et quod periculosius videbatur  
ecclesia lignea ad comburendum eos paratior habebatur.  
cf. Plezia, *Gall*, p. 114.
- 7) [P] "solarium coopertum" —— 「覆いのある回廊」 —— は、中世の木造教会の壁に沿っている回廊で、たとえばポドハレの若干の教会に見ることができる。この箇所は、このような回廊がすでに十二世の木造教会に存在していたことを示しているように思われる。
- 8) [P]すでにドゥゴージは、この箇所を次のように解釈している。すなわち、大司教マルチンは、屋根の中にあった屋根裏部屋に身を隠した、と。([訳注]念のため、以下原文を掲げる。"sublimus tectum oratorii inter laguearia conscendit illicque se occultuit." Dłógosz, *ibid.*,)
- 9) [M] Vergilius, *Aeneis*, VIII. 224. "pedibus timor addidit alas." ヴェルギリウス『アエネイス』第八卷：二二四「恐怖が彼の足に翼を与えた。」
- 10) [P] "altaria viatica" —— 旅行用の祭壇 —— は、大きくはないが極めて高価なものであった。年代記作者は、複数形を用いているので、おそらくは、祭壇だけでなく、それに付属していた器や祭儀用の衣のことも念頭にあったのではなかろうか。
- 11) [M] Psalm. 144-13. "sanctus in omnibus operibus suis." 『詩篇』 一四四ー一三「主は、そのすべての御業において聖である。」(『ウルガータ聖書』に依る。)

## 第四十四章

五  
九

さて、不撓不屈のボレスワフは、再びボモジェに攻め入り、大軍をもってチャルンクフの砦を包囲した<sup>1)</sup>。種々の城攻めの機械を用い、砦の壁よりも高い櫓を建て<sup>2)</sup>、非常に長い間、武器と城攻めの道具で砦を攻め立てた。そして

ついにこの砦を降伏させ、自分の支配の下に置いた。さらにボレスワフは、多くの者を異教からキリスト教の信仰へと改宗させ、また自ら砦の領主<sup>3)</sup>を洗礼の泉から引き上げたのであった<sup>4)</sup>。そこで、異教徒達と彼らの君主は<sup>5)</sup>ボレスワフがいかに易々とチャルンクフの砦人の傲慢を挫いたかを聞いた時、君主自らすべての者に先立ってボレスワフに降伏した。しかし、彼らのうちのどちらも長く臣従の約束を守らなかった<sup>6)</sup>。というのは、洗礼を受け、ボレスワフの霊的な息子<sup>7)</sup>となったかの者は、後に死罪<sup>8)</sup>に値する裏切りを幾度もくりかえしたからである。しかしそれについては、しかるべき所で語ることにして、ハンガリアからやってきた皇帝と<sup>9)</sup>、ボヘミアからやってきたボレスワフのことに話を戻すまで、今のところは触れずにおくこととしよう。そしてもしそれ以前にどこかで言及することになったら<sup>10)</sup>、その場所に挿入することとしよう。

## (44)

Igitur inpiger Bolezlauus iterum Pomoraniam est ingressus : et castellum obsessurus Carnkou<sup>1)</sup> magnis viribus est aggressus, : machinis diversi generis preparatis, : turribusque castellana munitione preminenciorebus elevatis<sup>2)</sup>, : armis tamdiu ac instrumentis oppidum inpugnavit, : donec illud facta dedicione suo dominio mancipavit. : § Insuper etiam ad fidem multos ab infidelitate revocavit, : ipsumque dominum castelli<sup>3)</sup> de fonte baptismatis elevavit.<sup>4)</sup> : Audientes autem hoc pagani, ipseque dominus paganorum<sup>5)</sup>, : sic facile videlicet corruiisse contumaciam Charncorum, : ipse dux Bolezlauus primus omnium (se) inclinavit, : sed eorum neuter longo tempore fidelitatem observavit<sup>6)</sup> : § Nam postea baptisatus ille Bolezlauus filius spiritalis<sup>7)</sup> : tradiciones fecit multimodas dignas sentencie capitalis<sup>8)</sup>. : Sed ista suo loco recitanda presentialiter sub silencio contegamus, : donec imperatorem de Vngaria<sup>9)</sup>, Bolezlauum vero de Bohemia reducamus : et siqua prius fieri contigerint<sup>10)</sup>. inducamus. :

五  
八

1) [P] ノテツ川に沿った砦。この戦が行われたのは、一一〇八年の夏のことであった。

2) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 21-3. "oppidum circumscedit, vineis turribusque et machinis omnium generum expugnare aggreditur." サルスティウス『ユグ

ルタ戦記』二一—三「砦を包囲し、蔽物ややぐらや、あらゆる種類の城攻めの機械を用いて、攻め滅ぼそうとした。」

- 3) [P] 第二卷第四十七章から見て彼の名はグニエヴォーミル Gniewomir であることが知られている。
- 4) [P] "de fonte baptismatis elevavit." 「洗礼の泉から引き上げた」——すなわち、彼のキリスト教徒としての父となった——。
- 5) [M] すなわちボモジェ全土の公 dux であり、すでに第三十九章で言及されているボモジェ公であろう。
- 6) [P] "eorum neuter" 「彼らのうちどちらも」——すなわち、グニエヴォーミルとボモジェ公。
- 7) [M] "filius spiritalis." 「霊的な息子」、——この表現は『教会法集成』Corp. iur. canon. c. 7. c. 30. q. 1 "filia dicitur spiritalis." から採られたものと思われる。
- 8) [M] "sententia capitalis." 「死罪」——この言葉は『民法典』Corp. iuris civilis. から採られたように思われる。
- 9) [P] 第二卷第四十五章、第四十六章の叙述への示唆。
- 10) [P] 第三卷第二十五章参照。

## 第四十五章

さて、同じ話題に長く留れば、怠け者ではないかと思われるので<sup>1)</sup>、今は、ポモジャ人からボヘミア人へと話題を変えよう。

ところで、ボレスワフが堅く国の番人として立ち、力を尽して父祖の土地の名誉を守っていた時、たまたまモラヴィア人が侵入し、ポーランド人の知らないうちに、先にコシレの砦に到着しようと試みたことがあった<sup>2)</sup>。その時ボレスワフもまたラチブシの砦を<sup>3)</sup>、可能ならばそれを占領すべく、勇敢な騎士若干名を派遣した。しかし自分自身はこのために狩猟や休息をとり止めようとしなかった。他方、出陣したあの勇敢な騎士達は、モラヴィア人と戦を始めたが、その地でポーランドの優れた騎士数名が倒れた。しかしその仲間の者達は、野戦においても勝利を収め、砦攻めについても勝利の裡にそれを占領することに成功した。こうしてモラヴィア人は打ち倒されたのである。

五  
七

かくして、かの砦の人々、何も知らぬままに倒れたり<sup>4)</sup>。

その間、皇帝ヘンリク四世は<sup>5)</sup>ハンガリアに侵入したが、そこで利益も名誉もほとんど手に入れることができなかった。しかし、目下のところは、我々



は皇帝やハンガリア人の行いについては論じないでおこう。しかしこれらのことに触れる時には、ボレスワフの信仰と勇気について語ることとしよう。

## (45)

Nunc autem de Pomoranis ad Bohemos convertamur, : ne diutius Circa idem immorantes pigritari videamur<sup>1)</sup>.

Igitur Bolezlauo in terre custodia persistente : et honori patrie totis viribus insistente, : contigit forte Morauenses advenire, : volentes castrum Kosle<sup>2)</sup>, Polonis nescientibus, prevenire. : § Tunc quopue Bolezlauus quosdam probos milites ad Ratibor<sup>3)</sup>, si possibile sit capiendum misit, ipse tamen propterea vel venari, vel quiescere non dimisit. : Illi vero probi milites abeuntes : et certamen cum Morauensibus ineuntes, : ibi probi quidam de Polonis in prelio corruerunt, : socii tamen eorum et victorie campum et castellum habuerunt. : Sic sunt in prelio Morauenses interempti :

Et sic illi de castello ignorantes interempti<sup>4)</sup>.

§ Interea Henricus imperator quartus<sup>5)</sup> Vngariam” introivit, : ubi parum utilitatis vel honoris acquisivit. : Nos autem de gestis imperatorum vel Vngarorum ad presens non tractamus : sed hec commemorando Bolezlau” fidem et audaciam predicamus. :

1) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。

2) [訳注] ヴロツワフとクラコフの中間地点にある、オドラ川沿いの砦。

3) [M] オドラ川に沿った砦で、『コスマの年代記』第三卷第二十二章に次のような記述がある。「ポーランドの国境に対する堅固な砦」。この地の戦は一一〇八年の秋に行われた。

4) [M] 二連の八音節トロカイックの詩。

5) [P] ヘンリク四世(ローマ皇帝として。ドイツ王としては、ヘンリク五世の名で知られている。)は一一〇六から一一二五年まで統治したが、皇帝に戴冠されたのは一一一一年であった。ハンガリアへの侵入は一一〇八年九月に行われた。

## 第四十六章

さて、ハンガリア王コロマンとポーランド公ボレスワフの間には、次のような約束があった<sup>1)</sup>。すなわち、もし皇帝が二つの王国のどちらかに侵入した時には、他方の者は、その間にボヘミアの地を閉ざすというものである。それゆえ、皇帝がハンガリアに侵攻した時<sup>2)</sup>、ボレスワフもまた約束を守って、森の中で戦を交え<sup>3)</sup>、その勝者としてボヘミアの地を閉ざしたのであった。その地で三日三晩火を放ち、三つの城主の館と一つの都市近郊の地を破壊した<sup>4)</sup>。この後、ボレスワフは、裏切りによってボレスワフの砦を占領したポモジャ人の方へとすばやく立ち戻っていった。

## (46)

Erat enim inter regem Vngarorum Colmannum : et ducem Polonie Bolezlauum coniuratum<sup>1)</sup>, : quod si regnum alterius imperator introiret, : alter eorum interim Bohemiam prepediret : Quando ergo cesar Ungariam introivit,<sup>2)</sup> : Bolezlauus quoque, fidem servans, in medio silvarum prelio commisso,<sup>3)</sup> victor Bohemiam prepedivit, : ubi tribus diebus et noctibus comburendo tres castellanias unumque suburbium dissipavit<sup>4)</sup> : et sic cito pro Pomoranis per traditionem sua castra capientibus remeavit. :

- 1) [P] この約束が第二卷第二十九章で言及された両者の会見の際に結ばれたものか、それともその後の機会に結ばれたものかは不明である。[M] Novotny, *České dějiny* 1 pars 2, 445-5, 448.
- 2) [M] Novotny, *České dějiny* 1 pars 2, 449. Meleczyński, *Bolesław Krzywousty*. p. 63  
 [訳注] ヘンリク五世のハンガリア出征についてのマレチンスキの説明は次のようである。すなわち、一一〇八年ヘンリク五世は、叙任権闘争をめぐって分裂していたドイツ諸侯の力を一つにまとめ、さらに自らの戴冠をめぐる法王との交渉をより有利に進めるために、東征を企図し、チェコ公シフィエントペウクの軍を使ってポーランドを西から攻撃させ、自ら主軍を率いてハンガリーの西部に侵攻した。
- 3) [P] ズデツキの森（ズデーテンの森——訳者）は、ポーランドとチェコの国境に横わっており、両国にとって自然の要害をなしていた。従って、侵入者にとっては、この森を越えねばならず、防衛する側にとっては、この森は最初の防衛線となった。
- 4) [M] この戦は一一〇八年の十一月に行われた。[訳注] この戦には、ハンガリア王

コロマンも参加し、モラヴィアを荒廃の地に变えた、と伝えられている。*Cosmas III.* 25.

## 第四十七章

さて、ボレスワフが不在の時<sup>1)</sup>、ポモジャ人はボレスワフの砦ウシチェを包囲した<sup>2)</sup>。しかもこの砦をポーランド人はグニエボーミルの裏切りの計によってポモジャ人に引き渡してしまったのである。しかしこのグニエボーミルは<sup>3)</sup>、まさにボレスワフによって占領されたチャルンクフの砦の者であり、ボレスワフ自らによって洗礼を施され、他の者が殺された時もその命を助けられ、逆にチャルンクフの城の領主に任命された当の者であった。ところが、この不信仰者、偽誓の者、忘恩の徒は、ボレスワフはボヘミア人に討たれ、すでにドイツ人に引き渡されていると言って、砦の者達に誤った忠告を与え、砦を明け渡すように促したのである。他方、ボレスワフの軍勢が非常に骨の折れる、また非常に危険な道を通してボヘミアから帰還した時、ボレスワフは自分に対しても、また疲労した兵士達に対しても、また弱った馬に対しても、いたわりの心を示すこともなく、昼も夜も休むことがなかった。そして多くの騎士の中から少数の者を選び出し、彼らを率いてその地に急行した<sup>4)</sup>。たとえば、ボレスワフが他のことを何もしなかったとしても、少くとも不義不正に対して報復するボレスワフの意志を示すことができたし、また自分が元気でまだ殺されていないことを明らかにすることができた。というのは、ボレスワフと戦を交えようとする者は誰もいなかったし、戦を始めようとして戦場に舞い戻ってきた者を敢えて迎え打とうとする者は、誰一人いなかったからである。こうしてボレスワフは損害を与えることもなく、またそれを被ることもなく、国に帰っていった。

五四

(47)

Iam eo absente<sup>1)</sup> Pomorani Vscze<sup>2)</sup> Bolezlaui castrum obsederant : et illud Poloni Pomoranis iam Gneuomir<sup>3)</sup> per traditionem suggerente reddiderant. : § Erat enim iste Gneuomir de castello Charncou, quod

Bolezlauus expugnavit : et quem ipse de fonte baptismatis elevavit : et ceteris interemptis vite reservavit : et in ipso castello dominum collocavit. : § Hic vero perfidus, periurus, immemor beneficii, perverso consilio castrum reddere consulit castellanis, : menciendo Bolezlauum superatum a Bohemis : et iam redditum Alemannis. : Exercitu itaque tam laborioso itinere tamque periculoso de Bohemia redeunte, : nec sibi, nec viris fatigatis, : nec equis macilentis : pepercit, : nec die noctuque quievit, : donec illuc festinans cum paucis, quos de multis eligere potuit (advenit)<sup>4)</sup> et si non aliud fecit se velle iniuriam vindicare, saltem innotuit : eumque sanum et non superatum apparuit. : § Nullus enim se contra eum ad bellum preparavit, : nullus enim (eunti) vel redeunti pugnaturus obviavit : et sic nec dampnum faciens nec recipiens remeavit. :

1) [M] 一〇〇八年の八月の頃。

2) [訳注] ウシチェ Uście は、ポズナニの北方にあって、ノテツ川に沿った砦。

3) [訳注] 第二巻第四十四章に言及されたチャルンクフの城主である。

4) [P] ウシチェの地。この出征は一〇〇八年の終りになされた。

## 第四十八章

ボレスワフは、しばらくの間、馬と騎士に休息を与えた後、あらためてポモジェへ戻る準備にとりかかり、再び戦のために軍隊を編成した。さて、敵地に入った時、ボレスワフは戦利品や家畜の群を追い求めず、城攻めの機械や色々な道具を用意してヴィルニの砦を包囲した<sup>1)</sup>。それに対して砦の者達は、命が救われる見込みはないと思い、ただ武器だけを頼りにして、城の壁を高くし、壊れた壁を修理し、先の尖った杭<sup>2)</sup>と石とを上運び込み、城門を閉ざして防備を固めた。こうしてポーランド人は、城攻めの機械を組み立て、全ての兵士が武器に身を固めると、あらゆる方面から勇敢に砦に攻撃を加えた。ポモジャ人もそれに劣らず激しく防戦した。ポーランド人は正義と勝利のために大胆に攻め続けたが、ポモジャ人は、生れながらの異教と自らの安全を守るために抗戦した。ポーランド人は栄光を追い求め、ポモジャ人は自由を擁護した<sup>3)</sup>。しかし遂にポモジャ人は断え間のない困苦と徹夜の見張りに疲れ、

もはやこのような力には抗することができないと悟って、当初の傲慢なうぬばれを捨て、命の保証としてボレスワフの手袋を受け取り<sup>4)</sup>、自らと砦とを引き渡した。しかし、ポーランド人はこれ程大きな労苦、これ程多くの戦死、厳しい冬、これまでの裏切りと奸計を忘れることができず、全員を殺し、誰をも容赦しなかった。そしてこれらのことを禁じようとしたボレスワフの命令にも耳を貸そうとはしなかった。

こうして反抗的で傲慢なポモジャ人は、徐々にボレスワフの手によって打ち滅ばされていった。それは正当にも不信仰の者が滅びに向うのと同様である。ボレスワフはこの砦を確保しておくために、前よりも強固な備えを施し、それに必要な物資を与え、自分の騎士達をそこに配置した。

## (48)

Iterum aliquantulum equis et militibus recreatis in Pomoraniam redire parat Bolezlaus iterum ad bellum cohortibus instauratis. Hostium ergo terram ingrediens, non predas sequitur vel armenta, sed castrum Velun<sup>1)</sup> obsidens, machinas preparat ac diversi generis instrumenta. § At contra castellani vite diffidentes, solummodo in armis confidentes, propugnacula relevant, destructa reparant, sudes preacutas<sup>2)</sup> et lapides sursum elevant, obstruere portas festinant. § Machinis itaque preparatis et universis adarmatis Poloni castrum undique viriliter invadunt, Pomorani vero non minus defendunt. Poloni pro iustitia et victoria sic acriter insistebant, Pomorani pro naturali perfidia et pro salute defendenda resistebant. § Poloni gloriam appetebant, Pomorani libertatem defendebant<sup>3)</sup>. § Ad extremum tamen Pomorani continuis laboribus et vigiliis fatigati, se non posse tantis resistere viribus meditati, de primo fastu superbie descendentes, sese castellumque, recepta Bolezlaui ciroteca pro pignore<sup>4)</sup>, reddiderunt. § At Poloni tot labores, tot mortes, tot asperas hiemes, tot traditiones et insidias memorantes, omnes occidunt, nulli parcentes, nec ipsum etiam Bolezlaum hoc prohibentem audientes. Sicque paulatim rebelles et contumaces Pomorani per Bolezlaum destruuntur, sicut iure perfidi destrui debent. Castellum vero Bolezlauius melius ad retinendum affirmavit, eoque munito necessariis, suos ibi milites collocavit.

- 1) [訳注] ポズナニ北西にある、ノテツ川に沿った砦。この攻囲はおそらく一一〇八年と一一〇九年の間の冬に行われた。
- 2) [M] Sallust, *Bellum Catilinae* 56-3, alii praeacutas sudis portabant.” サルステイウス『カティリナ戦記』五六―三、「ある者は、先の尖った杭を運び込んだ。」
- 3) [P] これは対比的な文章であるが、第三卷第八章のグローグフ城攻囲の非常に詳細な叙述もこれと同じ文体で構成されている。
- 4) [P] この興味深い慣習の由来は不明である。[G] 口語的諺から、以下のことが知られている。すなわち、手袋を投げ捨てることは、戦いへの挑戦を意味し、新しい所有者の手に移るという法的行為は、手袋を手渡すことによって示される。しばしば、この目的のために、印としては帽子が用いられた。Grodecki., *Kronika Polska*, p. 138.

## 第四十九章 六百人のポモジャ人がマゾフシェで打ち殺された。

しかしながら次の年の夏<sup>1)</sup>、ポモジャ人は戦利品を略奪するために結集してマゾフシェに侵入した。しかし彼らがマゾフシェ人から略奪しようとすれば、それだけ自らがマゾフシェ人から略奪されることになった。実際、彼らはマゾフシェを荒し回り、略奪品と捕虜を集め、建物に火を放ち、何も恐れることなくそれらのものを側に置いて居すわり、戦を懸念することもなかった。しかし、見よ、当時、マゾフシェを治めていたマグヌスという名の伯が<sup>2)</sup>、数は少ないが、勇気において多くの者に匹敵するマゾフシェ人を率いて、優勢な、否無数といってもよい程の異教徒に対して驚くべき戦を敢行したのである。事実、そこにおいて神は自らの全能の力を示された。というのは、その地では、異教徒達の内、六百人以上が打ち殺され、略奪品も捕虜もすべてマゾフシェ人に返還された、といわれているからである。また明らかにその他の生き残った者達も、捕えられたり、逃亡したりした。確かにこの地域の司教シモンは<sup>3)</sup>、狼の牙によって引き裂れた自分の子羊達を、司祭服を着たまま悲しげな声で呼び求めているが、この世の武器をもってしては許されないことを、霊的な武器と祈りによって成し遂げようと努めた。すなわち、昔のイスラエルの息子達が、モーゼの祈りによってアマレク人を打ち破ったように<sup>4)</sup>、今やマゾフシェ人は、自分の司教の祈りに助けられて<sup>5)</sup>、ポモジャ人に対する勝利を獲ち得たのである。また、次の日、二人の婦人が小道で野いちごを摘んでいた時、一人のポモジャ人の騎士を見つけ出し、それによって新たな勝

利を加えた。というのは、彼女達は彼から武器を取りあげ、後から手を縛り上げ<sup>6)</sup>、彼を伯と司教の前に引き連れていったからである。

#### (49) SEXCENTI POMORANI IN MAZOUIA SUNT PEREMPTI

Sequenti tamen estate<sup>1)</sup> congregati : transierunt in Mazouiam predam capere Pomorani : Sed sicut sibi Mazouienses predam facere sunt conati, : sic ab ipsis Mazouiensibus preda fieri sunt coacti. : Ipsi nempe per Mazouiam cursitantes, : predam et captivos congregantes : et edificia concremant, : iam securi cum preda stabant, : nec de bello dubitabant. : § Et ecce comes nomine Magnus<sup>2)</sup>, qui tunc Mazouiam regebat, cum Mazouiensibus, paucis quidem numero, probitate vero numerosis, contra plures et innumerabiles paganos horribile prelium intravit, : ubi Deus suam omnipotenciam revelavit ; : § namque de paganis ibi plus quam sexcentos aiunt interisse, : predamque totam illis et captivos Mazouienses abstulisse ; : residuos quoque vel capi, non est dubium, vel fugisse. : § Quippe Symon<sup>3)</sup>, illius regionis presul, oves suas lupinis morsibus laceratas luctuosis vocibus cum suis clericis infulis indutus sacerdotalibus sequebatur et, quod armis sibi materialibus non licebat, : hoc armis perficere spiritalibus et orationibus satagebat. : Et sicut antiquitus filii Israel Amalechitas orationibus Moysi devicerunt<sup>4)</sup>, : ita nunc Mazouienses de Pomoranis victoriam, sui pontificis adiuti precibus<sup>5)</sup>, habuerunt. : Sequenti etiam die due mulieres, : fraga per devia legentes, : uno milite Pomoranorum invento novam victoriam. retulerunt, : quem armis exutum, religatis post tergum manibus<sup>6)</sup> in presentiam comitis et pontificis adduxerunt. :

1) [P] 一一〇九年の夏。

2) [P] 若干の人々はこのマグヌスを、一〇九二年からヴロツワフの伯であった人物と同一の者であると見なしている。第二巻第四章注9)を参照。

3) [P] ブウォックの司教シモン。第一巻の序言の手紙の名あて人の一人。在位はおそらく一一〇八年から一一二五年まで。

4) [P] 『出エジプト記』第十七章八節から十三節までの記述への暗示。

5) [M] それゆえ、年代記作者は司教シモンを親しく知る者であったと考えてよいであろうか。

- 6) [M] Vergilius, *Aeneis*, II-57, "manus iuvenem……post terga revinctum." ヴェルギリウス『アエネアス』第二卷…五七「若者の手を後手に縛り上げて」。

## 第五十章

ボヘミア人とともにシロンスク地方で略奪を働き、火を放っていたズビグニエフの騎士達も<sup>1)</sup>、同様の不運にみまわれて、その地の住民達によって打ち滅ばされた。ある者は捕えられ、ある者は刀で切り殺された。

さて、これらの細部に言及した今、大事に関わる第三巻に入る前に、少しの休息を取ることにしよう。

第二巻の終り

(50)

Zbigneui quoque milites cum Bohemis per regionem Zleznensem depredantes et concremant<sup>1)</sup>, : simili infortunio ab ipsis affinibus superati, : quidam vero capti quidam gladio iugulati. : Hiis autem minoribus pretaxatis, aliquantisper quiescamus, : ut contextum de maioribus librum tercium adeamus. :

EXPLICIT SECUNDUS LIBER

- 1) [M] この急襲もボモジャ人のマゾフシェ侵入と同じ年に行われた。Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*. p. 74. Novotny, *České dějiny* I pars 2, 485.